

平城宮第71・72・73次発掘調査概要

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が特別史跡「平城宮跡」において行っている発掘調査のうち、昭和46年2月以降に調査を開始した第71次・72次及び現在調査を続行している第73次調査についてその概要を報告する。各次別の調査地区・発掘面積・期間は次のとおりである。

調査次数	発掘地区	面積 ^a	発掘期間
71次	6 A D D - Q . N 6 A D E - A . B . K	40.0	1971.2.16 ~ 1971.4.
72次	6 A B P - F . G 6 A B Q - C	39.2	1971.4.16 ~ 1971.8.
73次	6 A A Q - B . D . F	43.0	1971.7.10 ~

第71次調査（馬寮）

調査地域は西南中門の東、第25次の調査地に接するところである。この地域はさきの第63次調査同様「馬寮」の一部であり、西面中門の関係からその南の境界が推測されるところである。

検出した主な遺構は掘立柱建物・柵・溝・井戸などである。

調査地域東部の柵SA5950は、官衙の東を画するもので、今回13間分を検出するとともに、その南端を確認することができた。またこの柵SA5950の東8mのところを平行して、南北に走る溝SD5960は柵の南端のほぼ延長線上で東に折れる。調査地域西北にある南北棟SB6100は第50次調査で、桁行16間、梁間2間の建物であることが判明していたものであるが、今回の調査によって西側の柱列の南から3間分だけ廂がつくことが判明した。調査地域南辺のほぼ中央部で一部分であるがバラス敷面を確認した。これは西面中門より東に通じる道路敷の一部分と推定される。

以上にあげた遺跡のほか、平安時代に属する井戸4基、調査地域中央では時期不明ではあるが小規模な各種掘立柱建物が重複した状態で検出された。また平

城宮以前の遺構として弥生時代・古墳時代の穴や溝がある。出土遺物は瓦・土器が主なものであるが、他の地域に比較して量は少ない。瓦では藤原宮式がめだつ。

以上今回の第71次の発掘調査によって官衙の南の境界を明らかにすることができた。これによって、これまでに行なった7回の調査を含めて、一つの官衙の全規模を明確にすることができた。

官衙ブロックは西面中門から西面北門にいたる南北280m、東西120mの広さである。この範囲から掘立柱建物・柵・築地をはじめ多数の遺構を検出した。建物群は数回にわたる造営が認められるが、これらはすべて築地と柵に囲まれた区画内にある。しかもこれらの建物群は主に区画内の北部に集中しており、中央部は広い空間となっている。また建物には桁行が14間～21間という宮の他の地域では見られない非常に間数の多いものが集まっていることはこの地域の特色といえる。これらの建物が東西を84m（28丈）をへだてて南北に走る柵SA3680とSA5950、北は築地SA6475で囲まれていることは先述のとおりである。南については西面中門より通じる道路の一部と思われるバラス面及び東の柵（SA5950）、西の柵（SA3680）とでは若干の出入りがあるが東の柵の南端を境界と考えると南北は254m（84丈）になる。

以上のような官衙ブロックについては、すでに1969年度年報において報告し、これを主馬寮と推定した。その後、今回までの一連の調査における出土遺物の整理の段階で、墨書土器「内厩」2点、「主馬」1点を発見している。

この発見によって少なくとも奈良時代末期に主馬寮・内厩寮なる官司が置かれたことがいっそう確実視されるに至った。以下、主馬・内厩両寮について若干述べる。内厩寮は天平神護元年（765）2月、近衛府の設置と同時におかれた官司で、任官記事からみると近衛府官人との兼職が多い。また、主馬寮は設置年時を詳かにできないが、頭、助の任官が天応元年（781）が初見である。一方、令制の左右馬寮は宝亀10年（779）、左馬頭正月（牟都支）王の任官を最後に大同3年（808）まで史料には見えないことから、左右馬寮は主

馬寮に統合されたものといえよう。

このように奈良時代末に設置された内厩，主馬両寮は大同3年（808）に廃され，もとの左右馬寮が復活するのである。上述のとおり，主馬，内厩と墨書された土器の発見によって，奈良時代末には，両寮がこの地域に存在したことが確定的であるし，発見遺構の重複関係から奈良時代を通じて同規模の官司が存在していたことが判明する。平安宮古図によれば，おおよそのところ宮城西方の位置に左右馬寮があり，発掘調査による官衙の位置もほぼこれと一致している。

第72次調査

第72次調査は，昨年度におこなった第69次発掘調査を継続し，この地区の理解をさらに高める意図のもとに実施した。発掘区の設定は2ヶ所でおこない，その1は第69次調査であきらかになった正殿建物の北後方地域（6ABP-F・G地区），その2は第69次調査地区の南前方地域（6ABQ-C地区）である。

6ABP-F・G地区は朱雀門中心線の北方延長上にあたり，佐紀丘陵末端の台地上に位置する。

6ABQ-C地区は台地の南裾部で，朱雀門中心線の東側にあたる。

発掘面積は6ABP地区2170㎡，6ABQ地区1750㎡である。

発掘した遺構についての記述は6ABP地区と6ABQ地区にわけておこなう。

6ABP-F・G地区

検出された主な遺構は建物8棟，塀8条，溝10条などで，およそA・B・C・三つの時期にわけることができる。それらは第69次調査の時期区分A・B・C.と一致する。ただ69次調査で存在したD期の遺構は今回検出されなかった。

A 期